

記憶力が低下する歳になって考える医師の価値 —“なぜかと考える”ことの重要性

宮崎 正信*

私は研修を国立病院医療センター（現 国立国際医療研究センター病院，東京）で行った。そのときに学んだことは多々あるが，2年間で感じたのは，“なぜかと考える”ことの重要性だった。学生時代の記憶する勉強が役に立たないことを思い知らされた。ワシントンマニュアルが臨床のすべてだと思い，いつも手にして読んでいたが，ある日，“病態”という観点からみた医学の面白さに出会った。

IgA 腎症を専門にしている先生がレクチャーに来られると聞いて，何気なく参加した。“なぜ，IgA 腎症の患者さんでは，血清 IgA が高いのか？”というのが，その先生の一言めだった。それまで，考えたことがなかったので驚いた。“IgA を作るのは B 細胞，IgA 産生 B 細胞が増えている，そしてそれを刺激するのは T 細胞で，IgA 産生に関係する T 細胞が増えている”など，次から次へと患者さんの体の中で起こっている疑問を解き明かしている講演に感動した。研修が終わり，長崎に戻ってからも，“なぜ IgA が上昇しているのか，それが腎症の発症にどう関係しているのか？”というその先生の言葉が頭から離れなかった。一時期は循環器医？として，心エコーや運動負荷心電図，右心カテーテルなどをしていたののだが，何としてでもその先生の下で勉強したいと思い，その当時の医局ではほとんど認められていなかった国内留学を夢見た。その先生が東海大学の堺秀人先生だった。何とか大学院に入学で

* 宮崎内科医院

き、東海大学では海外留学の1年間をはさみ、計5年間お世話になった。東京、神奈川での計7年間では多くの知己を得ることができ、私の宝となった。

今の臨床医学は、エビデンス、ガイドラインに満ちあふれている。それを駆使して臨床を診ることがスタンダードと思っている風潮があるように思える。タブレット端末には、多くの教科書、ガイドラインが入っており、瞬時に調べることが可能である。しかし、ガイドラインには、“なぜ”の奥に潜むサイエンスの面白さ、医学のアートとしての尊厳性は書かれていない。“記憶する”ことでは、コンピュータには敵わない。“医学情報”を“知識”として身につけるためには、“なぜかと考える”面白さを感じる事が大切で、このことが医師の生涯教育に必要な気がしてならない。記銘力が落ちてきたことを自覚するこの頃だが、まだ考えることはできるようである。

そういえば、“人間は考える葦である”とパスカルは言ったが、決して覚えるだけの生物ではないのである。人間の深みを考え感じるような医師こそ、今も未来も必要とされているのではないかとと思っている。